

の資料は目新しいものである。

北海道帝国大学医学部（北大医学部）は札幌医学校、函館医学校の消滅以降、本格的な医育機関である。著者は北大九期生として、創設期の教授の講義をうけており、創設期の教授群像を詳細に記述している。

北大附属医学専門部、北海道庁立女子医学専門学校については戦時下の医学教育について垣間見ることができ。

道立札幌医科大学は初めての新制医科大学として発足した。国内初の心臓移植、学内での教育改革を行ったが、学園紛争にも巻込まれた。

国立旭川医科大学は道内三番目の医育機関として設立され、その創設期について記述している。

大学の独立行政法人化による医学部と附属病院の行方、そして新しい臨床研修制度の導入による医育機関、医療機関、北海道のような広大な地域の医療は、どうなっていくのか、大きな転換期を迎えている。このような時期での本書の出版は誠に当をえたものである。何よりも著者九三歳での大冊出版、研究者にとって非常に刺激的なことである。

（島田 保久）

〔北海道出版企画センター、札幌市北区北十八条西六―二〇、電話〇一一―七三七―一七五五、B五判、四七七頁、四七二五円〕

館澤貢次（文） 加古里子（絵）

『ドイツ人に敬愛された医師 肥沼信次』

主人公肥沼信次について今から約十年前前、母校の放射線科の教授により、「戦前、ドイツに留学した先輩の医師で、ベルリン大学の正式の放射線医学の教授の資格をとりながら、戦後ドイツの人々を伝染病から救うために残留して働き、世を去った人がいるのだが、調査してみないか」と声をかけられたのを記憶している。

その人物が「肥沼信次」であったことは後日知った。その当時は余り関心を持たないで聞き過ぎてしまった。

今回、館澤貢次氏の『ドイツ人に愛された医師 肥沼信次』の書評を書くに当たり、日本医科大学図書館室長のT氏に依頼して、肥沼に関する資料を送っていただいた。それは肥沼が医学部四年生の時、大学の自治会報に投稿した論文「時空の統一理論に関する注意」昭和八年七月・学四・肥沼信次……、とあり、「一つの物体が、ある空間に位置する時の状態」をユークリッド空間とか、アインシュタイン空間とか、私の理解出来ない言葉と方程式を以て記述されていたのである。

肥沼は中学時代から数学が特別に好きな青年であったと聞いていたが、この新聞記事で、肥沼の姿を知る貴重な参考資料を得た感じがした。

（今回出版された肥沼信次伝について）

一九九五年（平成七年）に出版された館澤氏の著者『大戦

秘史・リーツェンの桜―敗戦の地ドイツでチフスと闘い、散った日本人医博・肥沼信次」は三二六頁に及ぶ大著であるため、多忙な医師や、若者、そして中学生、高校生には少し難解な本であった。

ところが新たに、三十二頁の絵本様式に纏められた本が出版された。編纂形式は前述の伝記とは全く異なり、加古里子氏の筆により、美しい挿絵が全頁に亘り画かれており、当時の様子が詳細に描写されて楽しい絵本となっている。

筆者の館澤氏は、ドイツに渡り、現地の人々に会って取材している。又リーツェン市の今日現存せる建物や顕彰額・樹木に至る迄、現場で調べた報告書を軸に物語は進行しているので臨場感がある。更に肥沼の育った東京都八王子市の戦時中の空襲の様子を併せて掲載し、読者に伝えている。

終章に、リーツェン市役所に(生前肥沼が人々に語った「日本の桜の美しさ」を伝えるために)五十本の桜の苗木が、肥沼の弟・栄治氏より贈られたことが述べられている。

(心に残る場面)

数学の好きな肥沼は、前述の如く、八王子の医師の長男として生まれた。父のすゝめで日本医科大学に進学し、更に卒業後は開講された初期の東京帝国大学医学部放射線科教室にて研究を開始した。そして三年後に、フンボルト財団の奨学生としてドイツに渡り、ベルリン大学の放射線医学研究所に入った。そこで数々の業績をあげた肥沼は、東洋人では初のベルリン大学の教授の資格を取得した。然し、当時のドイツ

では第二次大戦の戦局は悪化し、毎日の様に空襲が続いた。そこで日本大使館は、ドイツに住む四四五人の日本人全員を脱出を命じた。

然し肥沼は、独りベルリンの戦渦を避けて東北に向い、ポーランドの国境に近いエーベルスヴァルデに向った。

そこには肥沼が恋する戦争未亡人のシュナイダーの姉の家があり、恋人がそこに身を寄せていたからである。肥沼の胸中に、戦争が終わったら再びベルリン大学にて研究し、教壇に立つことを夢見ていたのかも知れない。

リーツェン市街では多くのドイツ人難民がポーランドより帰国の途路にあつて、発疹チフス等の伝染病で苦しんでいる姿があつた。当時医師が全て戦場に出て、リーツェンには伝染病を救う病院も医師もいなかった。

ソ連軍の司令官は、肥沼に伝染病院長を命じた。肥沼は、専門外の伝染病と闘うことになり、病院の設備も充分でなく、薬も欠乏し周辺の街やベルリンに出かけて苦労して集めて来た。然し疲労した肥沼も、ソファやベッドに倒れこむ様な状態となつた。肥沼は多くの患者を救済したが、肥沼自身も発疹チフスに感染し、日本の桜を見ることなく、世を去つた。

多くのドイツ人に敬愛されながら、異国に生き、医学に捧げた一途な生涯を、この本を通じて世の多くのの人々に知ってほしい。

この時肥沼は三十七歳五ヶ月という若さであつた。

(唐沢 信安)

〔瑞雲舎、東京都港区高輪二一六一三六一五〇五、電話〇三
一五四四九一〇六五三、二〇〇三年一月一〇日、A四判、
三二頁、一五〇〇円〕

館野 正美 著

『吉益東洞『古書醫言』の研究』

わが国の漢方医学の特質は吉益東洞氏の業績をにおいて語る
ことができない。明治の末に和田啓十郎氏が『醫界之鐵椎』
を世に問い漢方医学の復興を企図したときに、吉益氏の医説
を掲げて論陣を張った。和田氏に私淑した湯本求真氏がそれ
を受け継いで、大塚敬節氏をはじめ多くの門弟を輩出したと
きに、吉益氏の医説は日本を代表する伝統医学思想となつた
のである。

他の儒教文化圏に残る伝統医学と異なり、わが国の漢方医
学が西洋医学と両立しようとする思想的基盤を形成したのが、吉益
東洞氏がいまより約三世紀前にと考えた医説に負っているこ
とはようやく知られてきた。

本書は吉益氏の著書では話題とされることの少ない『古書
醫言』を取り上げて、現伝本と自筆本との比較をこころみ、
さらに吉益氏の有名な萬病一毒説や天命説に中国古典からす
る光を当てようとする意欲作である。吉益東洞氏はその強烈
な個性の故か、『葉微』でも『類聚方』でも一部を読んだだけ
で読者をして分かつた気にさせてしまう魔力を持っている。

しかしその思想的よりどころは評者を含めて意外に知られて
いない。

本書は第一部のテキスト編と第二部の医学思想編とから構
成されている。

著者のいう『古書醫言』の現伝本は、吉益南涯と北洲とに
よる校正後に文化十年に刊行された『古書醫言』であり、一
方では東洞氏自筆とされる順天堂大学所蔵の山崎文庫本があ
る。その間の異同を主に論じたものが第一部のテキスト編で
ある。資料批判を展開する著者の筆致は鮮やかに読者の興味
をつなぎ、資料の引用が繰り返されるのもまったく苦になら
ないほどである。

本書の白眉が第二部の医学思想編である。これは『古書醫
言』に引用された中国の典籍をたどることで吉益氏の古典解
釈を斟酌し、氏の医学思想の形成過程を追体験しようとする
意欲的な試みである。著者によれば吉益氏は単純に伝統医学
理論を全否定したわけではない。そこには吉益氏の人間的な
苦勞すらかいま見られるというのである。時代を率いた革命
的な思想家に共感しつつその歩みを跡付けるといふ手法は、
この孤獨な漢方家の雄姿を立体的に読者に伝えることに成功
している。

本書のごとく吉益東洞氏の思想を正面から解明しようとす
る正統的な研究の出現を歓迎したい。医学教育に漢方医学が
組み込まれるようになったという歴史的な壮挙は、発端をよ
くよくくだればほかでもない吉益東洞氏とその思想に行き着